
トルファン帝国記

鍵屋のカギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トルファン帝国記

【Nコード】

N7827F

【作者名】

鍵屋の力ギ

【あらすじ】

トルファン帝国・・・大陸最大で最も豊かな国。灰色の瞳の旅人はそこで自分を取り巻く全てと向き合う。緑の瞳の少年はそこで自分取り巻く全てが覆る。果たして二人は最後に何を知る……………？

0

0

風が吹く。

だが自分を取り巻く澱んだ気が晴れることはない。

真っ赤に染まった手が元に戻ることはない。

自分の嵌まった底なし沼から立ち上る腐敗臭にも、既に麻痺してしまっている。

今更感じることなど何もない。

しかしふとした瞬間浮かんでくる想いがある。

だが自分に考える必要などないのだ。

だからすぐに思考など捨てる。

捨てなくてはこの世を生き抜くことなど到底叶わないと昔から知っているから。

この世は虚無だとは言わないが、自分にとってどうでもいいことは違いない。

だから流れに身を任せ、流れるままどこまでも行ってしまう方がいい

――…

*

その日、空は鈍色だった。

あと数刻で雨が降り出すだろうと見当をつけて、男は体に巻き付けた外套をしつかりと押さえ、人通りの絶えない昼間のバザールの大通りを南に向かって歩き始めた。

淡い砂色をした外套は華やかなヴェールと茶色の外套の群れの中に違和感なく溶け込む。目立った特徴のない外套は、人の目に留まる心配もない。

男は目元まで引き下ろしていた外套のフードを少し上げ、前方にそびえる巨大な白亜の宮殿を見つめた。初めて王都を訪れた旅人ならば、まず目を惹かれる白の宮殿。常に常夏の国にあつてはその白さに目を焼かれる。

だが男の艶のない灰色の目には何の感慨も浮かばず、冷めたままだった。

宮殿から視線を外し、いつの間にか止まっていた足を一步踏み出す。

と、左手の小さな小屋から届いた声が再び男の足を止めさせた。小屋の方に目を向けると、この暑い中大量に着込み、頭から紗を被った人物の姿がある。着込みすぎと紗のせいで性別すら分からない。

怪しすぎる。

男は即座に無視を決め込む。だが数歩も進まないうちに三度、男の足は止められることとなった。

「おまえの使命は叶わないよ、確実にね」

先刻よりはつきりと届いた声は神々の言葉を伝える神官の厳かさ

を湛えていた。女のそれよりは深く、男のそれよりは穏やか。
だがどこかひやりとさせられる鋭いものが含まれている。

男はその鋭さに疑問を抱き、探るような目を相手にひたと当てて、
吐き捨てるように言った。

「何が言いたいか分からない」

「おや、知らんぷり？ でも本当は分かっているんでしょ、旅人さん」

人をおちよくる声音までもが耳にいつまでも残る美声。心地よい
声に含まれる小さな棘に警戒心が刺激される。

何かがおかしい。でも何が？

男はよりモノを観察するかのような冷たい目で相手を注視する。
それでも違和感の正体が掴めない。掴んだと思ったら、擦り抜けて
いく。

汗ひとつ浮いていなかった額に脂汗が滲む。

おかしい。何なんだ、この感覚は。

あの碧の瞳だ。

紗越しのあの目には思考の奥底を覗かせない壁がある。少しの隙
間もなく、他人の侵入を妨害する。それでいてこちらの思考など全
てお見通しだと言うように、唇の端は緩く吊り上げられている。

余裕のある者の勝ち誇った微笑みが。

「これを貴方に」

言葉とともに差し出されたのは今では滅多に使われなくなった羊

皮紙の巻紙。添えられていた白い花を目に留めて、男はびくりと羊皮紙を受け取ろうとしていた手を止めた。

「狭間の地に生を受けし、人の仔よ。汝、緋く染まった両の手を、緋く濁った虚ろの目を真と言つ名の刃にさらすならば、人の祈りを集めし悲しみの花とともに白き牢獄にて今宵花咲く。しかと伝えたぞ、東からの旅人よ」

投げかけられた言の葉に、背筋がぞくりと栗立った。
そういつことが……

「……了解」

羊皮紙を受け取り、言葉少なに応えを返した男は外套の中で右の拳を握り締めた。爪が掌の柔らかい部分に突き刺さる。
外套をひるがえし、男は早足でその場を立ち去った。
それゆえ気付かなかった。

その後ろ姿を見送る人の目に、微かな哀れみが混じったことを。

ここは『世界の宝石』と称される麗しの都——ナシーラルジュナ。大帝國トルファンの王都として文化を交易という咲き誇るふたつの大輪の花をその腕に抱く。

サルジャ川河口に位置するこの都は巨大な港を有し、また大陸の中央に位置することから陸と海、両方の東西交易ルートを確保している。

大陸一強大で華やかな国。それがトルファン帝國であつた。

折しも太陽は中天を少し過ぎ、一日のうちでもっとも暑い時に近付きつつあつた。

剥き出しの手足と首筋が太陽の光に灼かれ、ひりりと痛い。火照つた首に片手を当て、タンジュは王都の北に広がる商業地区・チャルシュの小高い丘の上から街の中心地を見やつた。

真円に築かれた城壁の内に、真白の塔が等間隔に幾本もそびえ立つ。

トルファンの王城『白の宮殿』である。

タンジュは、ほう……と感嘆の溜め息を漏らした。

いつ何時でも優美なる姿を見せる白の貴婦人。この帝國の全てを手の内に収め、動かす国政の中心地。今この瞬間も彼の場所での大帝國が動かされている。

だが彼にそのようなことは微塵も浮かんでいなかった。ただただ美しい姿に目と心を奪われ続けているのだった。

彼は毎日同じ時刻にこの丘に登り、宮殿を眺めている。

光を反射し煌く宮殿の白い城壁は今が一番輝く時。もうずっと昔からこの習慣を続けているタンジュにとってもっとも神聖な時でもあった。

「タンジュ——ッ おやつさんが呼んでるぜえ〜！」

自分を呼ぶ声が彼を現実に取り戻す。緩やかな坂道の途中で手を大きく振る青年の姿がある。タンジュの同僚バゴーである。

タンジュが栗色の奔放にはねる猫っ毛、宝石のような空色の瞳に、この国の人間にしては白い肌を持つのに対して、バゴーは緩く波立つ黒髪をうなじの辺りでひとつにまとめた、若草色の瞳を持つ褐色の肌の背の高い青年である。

「今行くよ！」

タンジュは傍に置いていた雑嚢を背負い、坂道を駆け下る。

「早くしねエとおやつさんに置いて行かれちまうぜ。なんだって今日の届け物は王城までなんだってさ」

バゴーのところまで辿り着いたタンジュは、その言葉にたださえ大きな目をさらに大きく見開き、一瞬のあと、顔一杯に歓喜の表情を浮かべ、叫んだ。

「王城に入れるの！」

「うそ！夢じゃないよね！」

「イ——ッ たたた！」

「つ、抓るなら自分の面にしろよ！ 何でおれを抓る！」

「あつ、ごめん」

ぱつと手を離し、謝るタンジュに涙目になったバゴーは溜め息をついた。

「まあ、タンジュに落ち着けて言っただけで無理なのは知ってたさ。でもな、いきなり抓ることないんじゃないか？ え、どうなんだよ」「ごめんって！ 悪気はなかったんだよ、悪気はね。興奮しちゃうて。痛い？ ごめんね、バゴー」

言葉とともに白い手がバゴーの両頬に添えられる。興奮のためか、罪悪感のためか、どちらとも知れない潤んだ蒼の瞳に下から見上げられたバゴーは、自分の頬に添えられた手の冷たさにぎよつとした。

「おまえ、また具合悪いんじゃないのか！ こんな冷たい手エして隠していやがったな！」

「大丈夫だよ、このくらい。心配ないよ」

「おまえの『心配ない』が心配なかったことあるかよッ！」
「痛ッ」

思わず手首を握ってしまったバゴーはタンジュの苦痛の声に我に返った。

「……ごめん。でもおれ、間違っただけだから。おまえは自分のことと大事にしなすぎ。側にいないとひやひやする。だから……」

手首を解放し、見上げてくる目を見つめてバゴーは言った。

「おれの隣にいつもいてくれ、相棒」

タンジュは柔らかに微笑み、頷いた。

「遅いぞ、おめえらッ！」

耳がびりびりするほどの大喝を甘んじて受けたふたりは、周りから『おやつさん』という呼称で呼ばれている熊のような容貌の大男の前で、よりいっそう縮こまった。

「バゴー、おめえは何しに行ったんだ。あらからどれだけ経ってると思ってる。一緒に遅くなるとはどういう訳だ！ ええ、言ってみるや！」

言ってみると言いながら、言葉とともに拳が飛ぶ。ごっつとバゴーの頭蓋骨とおやつさんの拳のぶつかる音に、タンジュは思わず首を竦めた。彼の小さな動作を目の端に捉え、おやつさんの鉄拳が今度はタンジュを狙う。

ぶんツと風を斬る音がした。

ひゃっ、と頭をそらしたタンジュはしまった、と思う前にもう一度飛来した拳を避けることができずに顔面から倒れ込み、土埃のたつ道にしたたか額と鼻をぶつけてしまった。

おやつさんは仁王立ちで腕を組んだ。

「時間を守れないやつなんぞ、いらねえんだ。聞いてるか、小僧ども。商人^{ソグド}にはソグドの掟がある。覚えとくんだな」

「あのなアおやつさん。説得力ないだろ、それ。いっつも遅れてくんのはおやつさんのほうじゃなか。それともいつものおやつさんは夢？ 幻？ たまたま今日は早かっただけでしょ。それとも王城に

行くから？ おやつさんも案外、胆が小さいねエ」

殴られた頭をさすりながらバゴーがしれっと口答える。横に並ぶタンジユは一気に青ざめた。

「ほう、口答える気が。拳が足りんようだな。もうひとついるか？」

拳を撫で、おやつさんは笑う。細められた目が怖い。バゴーはうつ、と詰まった。こんなときのおやつさんには逆らわないほうがいい。経験から判断してバゴーは黙った。

「最初からそうしてりゃいいのよ」

満足そうに腕を組んで立つ姿は一枚の岩のよう。どっしりとした存在感があり、ふたりの商売の師匠であり、父とも兄とも思っている男だ。

タンジユは赤くなった鼻をさすり、おやつさんを見上げる。タンジユとおやつさんでは頭ひとつ分以上の開きがあるのだ。

目線が合った。途端におやつさんの手のひらが額に当てられる。

「……タンジユ、おめえ隠してたな」

声は低かった。心配の色が混ざった声。バゴーに掛けられたのと同じ響きの言葉に、タンジユは一瞬瞳を揺らした。その一瞬をおやつさんは見逃さなかった。

「おめえは残れ。品物を届けるのはバゴーとふたりでいい」
「でも……」

タンジュは渋る。行き先はあの王城なのだ。憧れのあの場所なのだ。

だがそれよりも強く、置いていかれるという恐怖感が体を貫いた。でも、じゃねえ。そんな体で中に入れる訳ねえだろうが。今回は大人しく残れ。なに、王城に入れる機会なんぞ、これから増えていくさ。その為にも今日は無事にこの荷物を届けなくちゃならねえ。それとも足手まといになりにくるとでもいうのかい、タンジュ」

口調は乱暴だがその言葉が優しさからであることをタンジュは知っている。だからタンジュは渋々でも頷いた。

本心はどうあれ、この優しさを無下にはできない。この優しさを裏切ることとはできそうにない。

「じゃあ、タンジュは店に戻りな」

タンジュの肩に手を置き、バゴーが言う。置かれた場所からじわりと体温が伝わる。あっさり今まで感じていた恐怖感が消え去った。大丈夫。安心してふたりの帰りを待とう。店に戻って、おばさんと一緒に。

「今度はぼくも連れていつて下さいね」

「おう」

おやつさんが力強く頷く。

「帰ってきたら話を聞かせて。王城の話を」

「分かった。おまえの分までじっくり見物してくるよ」

邪魔にならないように荷車から少し離れ、呼び掛けたタンジュに、

バゴーはにっと笑い、おやっさんとともに荷車を曳いて裏通りから表通りに出て行った。

ふたりの背中が人混みに紛れて見えなくなるまで、タンジユはその場を動かなかった。

バザールの裏通りにある『雑貨屋』はそれほど大きな店ではない。表通りに軒を連ねる店とは比べものにならないほど小さい。だがいつも客足の途絶えない、気兼ねなく入れる親しみやすい店であった。

『雑貨屋』と看板を出しているものの、その実態はようするに『何でも屋』である。とにかく何でも扱っている。食料品から生活用品、衣類に書物やら、果てには武器までと、ありとあらゆるものが狭い店内に溢れかえっている。

「おばさん、戻りました」

店に戻ったタンジュはまず、女主人のおばさんに声を掛けた。丁度お得意さんの相手をしていたおばさんは驚き、「あら、どうしたの!」と言って、入口まで出てきた。

おばさんはふつくらとした上品な顔を少し傾げた。

「どうしたの、タンジュ。あなた、旦那さまと一緒にではなかったの」

おばさんの裾の長い薄青の上着が風に煽られてふわりと浮き上がる。入口に立ったままのタンジュは扉を閉めた。

「体調が思わしくなくて、戻されてしまいました。おばさんを手伝うように言付かっています」

「あら、だめよ。奥で寝ていなさい。店はわたしだけで大丈夫よ」

気遣う声音はどこまでも優しい。ここにもひとり自分を見ていて

くれる人がいる。心が温かくなる。

「そんな、だめですよ。それじゃあぼくが怒られます」

「そう……？　なら頼もうかしら。いつものように届け先の確認と伝票の整理を頼むわね。くれぐれも無理をしてはいけないわよ」

「はい」

返事をしたタンジュに笑いかけ、おばさんはお得意さんの相手に戻る。客はそのひとりだけだった。

珍しく思いながらタンジュはいつもの定位置の算盤の前に座り、帳面を開く。

と、正面の扉が唐突に開いた。

入ってきたのは若い男だった。砂色の外套のフードを目深まで被っているが、立ち姿から若い男だと分かる。すっと伸びた背筋が若木のようにしなやかに感じた。

「ご主人はおられるか」

男は外套も取らずに言った。少し冷たく感じる低い声。ちらりと見えた目は強い光を放っている。どこからどう見てもこの場にそぐわない。

なによりも纏う雰囲気ひどく近寄りがたいのだ。

「おやっさんに用事ですか。ただ今出ていて夕方まで戻らないですが」

不審に思いながらもタンジュは答える。男は未だに戸口に立ったままだ。逆光で表情は見えない。

「ひとりで出掛けているのか」

「いえ、もうひとり…」
「分かった」

最後まで聞かずに男は踵を返し、慌しく、だが音も立てずに、やってきたとき同様、唐突に去っていった。

後に残されたタンジュは何が何だか訳が分からず首をひねる。

おやっさんに訪ね人？ 若い男……。それも何だか怪しげな……。

胸騒ぎがした。何がそんなに引つかかるかは分からない。

だが確かにそのときタンジュの胸の中でもややもやとしたものが、形のつかないものが、生まれた。

男が去って少しすると、お得意さんの相手を終えたおばさんが奥からタンジユを呼んだ。

「タンジユ、ちょっといいかしら」

タンジユは算盤を弾く手を止め、帳簿から顔を上げた。

「はい、何ですか」

「これ……」と言っておばさんが取り出したのは古びた紙の束。辛うじて上部が紐でまとめてある。

「旦那さまの忘れ物みたいなものよ」

見覚えがあった。

おやつさんが行商のとき、いつも携えている御用書きの束だった。

「それは忘れていっちゃダメ、なものですよねえ……」

「そうなのよ。あの人ったら珍しく緊張していたみたいだから。きつと、ろくに確認もせずに出て行ってしまったのよ」

ふたりは同時に溜め息をつく。頬に手を添え、おばさんはもうひとつ溜め息を吐き出した。

タンジユはそんなおばさんに構いもせずに、ひとり思案にふける。

大丈夫かなあ……あのふたり……？ふたりともしっかりしてるよ

うで、ちょっと注意力不足気味だしな……。

「今頃困っているかもしれませんね。注文されたものを確認できずに」

「たぶんまだ着いていないと思うわ。あれだけ荷物を積んでいたなら足は遅くなると……」

ふとある可能性にタンジユは気付いた。

「もしやこれは絶好の機会？　ぼくも王城に行ける？
「ならばくが届けに行きましょうか？」

タンジユは努めて何気ない様子を装った。
「気付きもせずにおばさんは心配気に尋ねる。」

「体調は大丈夫なの？」

「はい」

「……………」

「少しかさつくおばさんの手がタンジユの額に添えられる。
くすぐったい。」

「おばさんはもう片方の手を自分の額に当てて熱を測った。」

「そんなに心配しないでください。本当に大丈夫ですから」

「おばさんの手がタンジユの前髪を撫でて離れる。」

「数秒考え込むようにおばさんが黙ると、店の前の裏通りを行き交う人々のざわめきが店内に忍び込んでくる。」

「タンジユに向き直ったおばさんは少し困った表情で口を開いた。」

「……では頼むわ。急いでくれる？ 大門の中に入ってしまったえば取次ぎは難しいのよ」
「はい」

タンジュは微笑んだ。

「気をつけて」

差し出された御用書きの束を手に、タンジュは外へ飛び出した。

*

「やあ、よく来たね」

長椅子に優雅に寝そべったまま、少年はそう言った。

窓から差し込む月光に照らされて、その姿と顔立ちはよく見える。
年のころは十六、七ほど。

蜂蜜に似た褐色の肌。

緩く波立つ金に近い茶色の髪。

この国の人の特徴でもある碧の目は、湖底の底のように澄み、それでいてあまりに深い。

昼間、バザールで出会った怪しい占い師と全く同じ瞳。ただ布越しでないぶん、その目はさらに深みを増してしていた。

そう、この少年が昼間の占い師であった。

身に纏う衣服は、西の異国風の長衣に青い腰紐を巻いているだけ。
一見質素にも見えてその実、長衣にも腰紐にも精緻な文様が描かれている。

かなりの身分にある者の姿だ。

だが男にはそのようなことは呼び出されたこの場所からすでに分かっていた。

「呼び出しておいて、それはない。それに昼間のあれは変装のつもりか？」

苛立ちを少し混ぜて言うてみるが、答える声は随分軽い口調だっ

た。

「変装は僕の趣味。それにね、呼び出したんじゃない。招待したんだよ」

くっ、と少年は小さく笑った。含むところが多分にありそうな笑い声。

癪に障る。

「はッ どっちにしろ同じだ」

「それもそうだね。君は来てくれたんだ。それでもう充分だよ」

くくっ、とまた少年が笑う。

笑い声だけでなく、少年の吐き出す言葉のいちいち癪に障る。

何が言いたい？

はっきり言えばいいだろう！

苛立ちが募る。だが顔には出さない。出したら負けだと知っている。こういう取引の場面では特に。

「来たくて来たんじゃない。あんたが何か知っているようだから来たまでだ」

「充分じゃないか。君は知りたいことがある。僕はしてもらいたいことがある」

「してもらいたいこと？」

「そう。お願い事」

「交換条件ということか」

手近な柱に背中を預けて問う。

「まあ、そうなるかな。当たり前でしょう？ それとも何もせずに情報が貰えると思っていたかい？ そんな訳ないよね。子供のお使いじゃあ、あるまいし」

「当たり前だ。ただし、ただでくれるというなら喜んでそうするが」
「ありえないよ」

少年はまた小さく笑う。

「だろうな。で、ご依頼を承りましょうか、雇い主殿？」

「いいね、余計なことを聞かないところが。でも僕の持ち札見せなくていいの？」

「いい。あんたの言うことだ。信じるさ」

「おや？ 信頼してくれるのかい？」

「信頼してる。あんたの座るその椅子を」

少年の顔が初めて笑い以外の表情を作る。

鋭く刃物のような真剣な顔。

それでいて声は笑いを含んだ愉し気な声だった。

「……初めてこの椅子が役にたったよ」

乾いた笑い声が、月光に照らされて青白く光る広すぎる広間に、少しの間、ふたりの間で漂っていた。

*

昼間の大通りはただでさえ人通りが多い。

その中を人を避けて通り抜けるのは骨が折れる。タンジユは遠回りになるのを承知で裏道のさらに裏の道に入った。

道の左右に立ち並ぶのは人口の大部分を占める庶民層——その中でも^{ヘイグ}工人と呼ばれる人々の住む集合住宅である。

砂色の土壁のそこかしこに赤や緑、黄色といった派手な色の洗濯物がひるがえっている。

庶民の唯一の贅沢品がこの色とりどりに染められた生地で作った衣類なのだ。

特にヘイグには染め師が含まれるため、他の庶民層に比べて格段に派手で美しいものが多い。

タンジユの身分は庶民層の中でも^{ソグド}商人と呼ばれる身分だ。

このトルファン帝国では身分が大きな意味を持つ。

この国の身分制度はまず頂点に唯一絶対の王、^{シャー}続く身分が^{バートル}三大賢者、^{バートル}貴族層、人口の大部分を占める^{フレイブス}庶民層、そして^{アイドラ}奴隷である。

親から子へ身分は受け継がれる。^{ヘイグ}工人の子供ならば^{ソグド}工人に。商人の子供ならば商人になる。

基本的に身分を変えることはできない。

唯一の身分を抜け出す方法は役人になることだ。だが国試に受か

るにはまず大金が必要とされる。

裏金がまかり通る世界。

それがこの国に巢食う暗黒の一面でもあった。

あともう少しで王城というところで、タンジュは表の大通りへと出る。大通りに近付くにつれて呆れるほど人の行き交いが増えていった。

タンジュは王城まで続く大通りを人波に流されながら歩いた。というよりは人波に押し潰されないように必死の小走りだった。

今日は月に一度の王城の開放日。

王城の広い庭園が開放され、そこで誰でも許可を取れば商いができる。人波はそのせいだった。

ふと視線を感じてタンジュは足を動かしたまま振り返った。

だが視線の主をこの人波の中からは特定できない。気のせいかと前に進むことに意識を戻す。

と、先刻よりもはつきりと視線を感じ、再び振り返った。

（なんだ……？）

嫌な感じを受けながらもタンジュは歩き続ける。

（あ、また……）

王城に入る為の跳ね橋まであと少しというところでまた視線をタ

ンジュは感じた。

視線は張り付いたまま離れない。

無視しようにも無視できず、タンジュは辺りを見回す。

華やかなヴェールと茶色の外套の群れ。客をひく物売りの威勢のいい声。水売りの男。花売りの少女。まけろと騒ぐ客。骨付き鶏の香ばしい匂い。砂っぽい風。人いきれ。

その中になぜか引つ掛かるものがあつた。

水売りの男に捉まっている砂色の外套の男。

先刻『雑貨屋』を訪れたあの男だつた。

目深まで下ろしていたフードが少しずれていて、男の顔立ちが見てとれた。

黒目黒髪の二十歳前後の男。

明らかにこの国の人間ではなかった。

男は水売りの男をあしらうのに苦戦しているようだが、目だけは王城の方に向けたまま逸れない。

何気なく男の視線の先を見たタンジュはあつと驚きの声を上げた。男の視線の先にいたのは荷車を曳くおやっさんとバゴーだつた。跳ね橋の半ばほどを進んでいる。

まずい。このままでは追いつく前に大門の中に入ってしまう！

「すみません！ 通していただけますかっ！」

謝りながら、人を押し退けて進む。だが人が多すぎてなかなか前に進めない。中には押し退けられたことに怒って押し返してくる人もいた。そうこうする内にもふたりはどんどん橋を渡って行く。

跳ね橋まであと数歩というところで砂色の外套の男と目が合った。

男は驚いたように瞠目する。水売りの男を押し退けて男も跳ね橋に近付く。

男は懷から何かを取り出したように見えた。

黒い塊のような――。

意識が男の手元に向いたその時、ぱんとかが破裂する音が雑踏を貫いた。道行く人々が一様に動きを止める。

すべての音が消えた。

一瞬の間のち、跳ね橋の上にいた男女が甲高い叫びをあげて逃げてくる。それにつられて次々に叫びがあがり、大通りは大混乱となった。

（あれはなに……）

悲鳴の渦巻く中でタンジユは見ていた。

炎上するおやっさんの荷車を――。

「なん、で……」

轟々と黒煙をあげ燃え続ける荷車の辺りを見つめたままタンジユは立ち尽くした。煙りのせいで跳ね橋の上はまったく見えない。おやっさんは？ バゴーは？ ふたりは無事なのか？

固まったまま動けないタンジユをも押し流して人波がさつきとは逆に流れている。されるがままのタンジユの耳に、誰かの声が響いた。

若い男の声が――。

「なに放けてる！ 逃げろ！」

ぐいっと肩を押される。それでも自ら動こうとしないタンジユに痺れを切らし、男はタンジユの腕を掴むと人波を押し退けて駆け

出し始めた。

掴まれた腕が鈍く痛み、やっとタンジュは茫然自失の状態から抜け出す。

固定されたままだった目を自分を引きずっていく男の背中に向け、その男が何者なのかを知った。

砂色の外套の男――。

目からの情報が認識された瞬間、タンジュは掴まれていた腕を振りほどいた。

「人殺し!!」

叫んだ喉がヒリヒリと痛んだ。

男が足を停めてゆっくり振り返る。

合わさった灰色の瞳は刃のように鋭く冷たい。

「この人が短筒で撃った！　ぼくは見たんだ！」

先程より声を張り上げる。近くにいた何人かが足を停める。だがすぐにまた走りはじめた。

「待つて！　誰かこの男を捕まえて！　誰か！」

必死に呼び掛けるもののもう足を止める者はいない。

「……来い。」

冷やかな目が静かにタンジュに圧力をかけてくる。腕を掴む指先にも力がかかる。

タンジュは恐怖した。

殺される。

強い強迫観念に圧迫されて、息が詰まる。ひゅうつと喉が細く鳴り、息ができなくなる。冷や汗が背中を伝う。

もう何も考えられなくなった。ただただこの場から、この男の前から逃げ出したいという思いに支配される。

「嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！！」

恐慌をきたしたタンジュがめっちゃめっちゃに腕を振り回す。筋肉の薄い骨張った腕がみりつと小さく嫌な音を立てた。

その音に気付いているのかいないのか、タンジュは腕を振り回し続ける。

あまりにも激しい抵抗に思わず男の力が緩んだ。

タンジュは体中全ての力を振り絞り男を突き飛ばし転倒させ駆け出した。

「待てッ！！」

後ろから男の声が追いかけてきたが、平均以下の身長タンジュはすぐに人波に飲み込まれ見えなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827f/>

トルファン帝国記

2010年11月27日14時02分発行